暑さも忘れる　穂高の熱い夏祭り

8月5日　第40回穂高納涼祭

夏の夕べを楽しむ穂高納涼祭が、穂高会館で開かれました。信州安曇野わさび祭りが幕を閉じた後、新たな納涼祭として、長年親しまれてきた納涼盆踊りから生まれ変わり４年ぶりの開催。あづみの鼓友会の勇壮な太鼓の演奏で始まり、中高校生などによる演奏や合唱、ダンス、民謡などが披露され、会場は大いに盛り上がりました。

ダンスを披露した渡邊琴菜さん・大久保蘭さん（豊科高校１年）は「多くの方にパフォーマンスを見てもらえる場になり、とても嬉しかった」と笑顔で話してくれました。

豊科駅前に活気　仲間と踊る夜

7月29日　第44回あづみ野まつり

「あづみ野ばやし踊り」を踊りながら国道147号を練り歩くあづみ野祭りが開かれ、34連約2300人がおそろいの服装や掛け声で踊りを披露しました。歩行者天国となった一帯には出店が立ち並び、多くの観覧者が訪れました。新型コロナや台風の影響で過去６年間思うように開催できずにいたことから、実行委員会では踊りの練習動画や全体での練習会を用意し、踊りが継承されるよう取り組んできました。４年ぶりに参加したという藤倉花衣（はない）さん（豊科北中１年）は、「コロナの影響で少人数で行うことばかりだったので、久々にみんなと一緒に踊れて楽しかった。」と話してくれました。

ふるさと三郷に咲く大輪の花　待望の夏のにぎわい

8月11日　第38回ふるさと夏祭り

三郷文化公園を会場にふるさと夏祭りが開催され、大勢の来場者でにぎわいを見せていました。会場には多くの屋台が出店し、浴衣や甚平を着た家族連れなどが４年ぶりの夏祭りを楽しんでいました。会場内のステージでは、市太鼓連盟の演奏や豊科高校書道部のパフォーマンスや三郷中学校吹奏楽部の演奏などが行われ、クライマックスには約700発の花火が夜空を彩りました。

母親と会場を訪れていた坂本紀美花さん（10）は「今日のお祭りをとても楽しみにしていた。花火を見ながら屋台で美味しいものをたくさん食べられて良かった」とイカ焼きを片手に笑顔で話してくれました。

Interview 安曇野きらりびと

おいしさ、楽しさ、大変さ わかちあう

農業体験を通じて
食・環境・農業を考えるきっかけづくり

大島　和美さん（穂高）

子どもに安全で安心な作物を食べさせたいという思いから、仕事の傍ら農薬・化学肥料・除草剤を使用しない体験型シェア農業に取り組む大島さん。活動をしていく中での気づきや思いを聞きました。

人とのつながりで広がる活動

出産を機に子どもに安全安心な食事をさせたいと思うようになり、食の安全性をより意識するようになりました。消費者側のニーズもあり、農作物の多くは見た目や生産性が重視され、安全性が二の次になっていることに対し疑問を抱くように。そこで化学肥料や農薬を使わない野菜づくりを学び、家庭菜園で実践しようと、同じ思いを持つ知人２人と「Eisbar Platz」を立ち上げました。

全員が農業初心者で、活動１年目は講師を招いて勉強会を開き、参加者を募って野菜を育てましたが、野菜の成長と活動頻度が合わず、思うように収穫できませんでした。しかし、活動を知った人から「担い手がいない田畑を使ってほしい」と声を掛けていただくことができ、２・３年目は大豆、米、ブルーベリーに特化し、参加者と一緒に農薬・化学肥料・除草剤を使用しない栽培に取り組みました。

１年目の反省を生かした結果、今度は順調に収穫でき、「作った農作物を使い切れない」という課題が生じました。そこでパン屋とコラボし、ブルーベリーを使ったパンやスイーツの販売を始めました。その後も活動に賛同する人の紹介で知り合った食品製造に関わる皆さんの協力を得られ、ジャムや米こうじ、みそなどの製品づくりや、マルシェでの販売、料理教室の開催につながりました。また、稲作参加者の中から４組が田んぼを新たに取得し、お米を作るようになるなど、うれしい発展もありました。

人につなげていただくことで少しずつ活動範囲が広がり、開始当初には考えもしなかった反響があり、やりがいを感じています。

できる形で続けていく

メンバー３人ともそれぞれ仕事や子育てがあり忙しいですが、得意な部分を生かしてフォローし合えたからこそ、ここまで続けられています。また、無農薬農業の実現には大きな労力がかかり、なりわいとして取り組むのは本当に大変ということを、身を持って実感しました。だからこそ、無農薬農家を応援したいという気持ちが強くなりました。自ら無農薬野菜を作れなくても、支援の形はたくさんあります。今後ライフスタイルの変化で活動に全力を注げなくなっても、買い物をするときに意識して体に良い物を選んだり、米と大豆は自分たちで作り続けるなど、無理なく楽しくできる取り組みを続けていきたいです。

MEMO
○ Eisbar Platz
ドイツ語で Eisbar は「ホッキョクグマ」、Platz は「場所」という意味。絶滅が危惧されるホッキョクグマから名前を付けた。農園の名前は「しろくまファーム」

静岡県出身。薬剤師としてドラックストアや調剤薬局で勤務後、免疫力や化粧により皮膚から体に入る化学物質の影響などに興味を持ち、化粧品のサロン運営に携わる。平成24年、結婚を機に安曇野市へ移住。令和元年４月に Eisbar Platz を設立。

Eisbar Platz Instagram

Vol.14